

第4回

# リーダーの覚悟を支えるには 自分とは正反対の腹心が必要

第27代首相として、デフレ政策を強硬に進めた浜口雄幸<sup>おさち</sup>。

後に盟友となる井上準之助を大蔵大臣に抜擢し、二人三脚で

難局に立ち向かう。命を賭して戦うリーダーの姿とは。

第4回は、「男子の本懐」を取り上げる。

本懐です」と口にしたエピソードがあるように、本作では命を賭して事を成し遂げるリーダーの潔さに触れることができます。広辞苑で「本懐」を調べると、「かねてからの願い」とあります。

リーダーは時として、苦しくつらい状況になることが明らかな事柄でも、それを実行しなければならぬ状況に直面します。四面楚歌の中で孤立無援となることもあるでしょう。

浜口が進めたデフレ政策は軍部の猛反発を招き、政財界からも非難を浴びます。当時、浜口が預かる国政の場では、「デフレ政策を行って命をまっとうした政治家はい

ない」とまで言われ、身の危険を覚悟する必要がありました。そんな状況でも、浜口はリーダーの務めを果たそうとします。

## 盟友とともに信念を貫く

本作の面白さは、浜口の盟友となった井上準之助を物語に加えて、「ダブル主役」で城山三郎が綴ったことにあると言えるでしょう。命を賭すリーダーには、腹心が必要だということを城山は暗示しているかもしれません。事実、国政での大業を一人で進めることの限界を知った浜口は、民間人だった井上を蔵相として任命しました。そもそも浜口は、損得勘定では



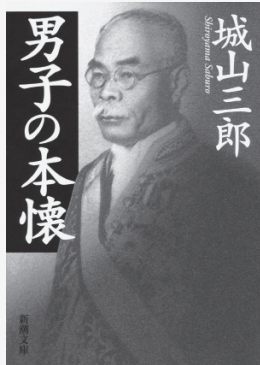
佐々木常夫 ささき・つねお  
1969年、東京大学経済学部卒業。東レ入社。繊維管理部長、経営企画室長、取締役などを経て、2003年に東レ経営研究所社長に就任。10年に佐々木常夫マネージメント・リサーチを設立し、現在に至る

動かず、信念や約束は反故にしません。日本銀行に入行しますが、たばこや塩の製造といった本流ではない職務を強いられ続けます。40代でようやく大きなポストを提示されますが、当時携わっていた塩の製造を途中で投げ出せないと固辞します。自分が見込んだ人にはすべて任せられる度量がありながら、どんな意見にも柔軟に耳を傾けるリーダーを城山は描いています。一方、井上も日本銀行に入行しますが、出世街道を歩みます。関

第一次世界大戦後で国内経済が混乱する1929年、立憲民政党の浜口雄幸が首相に就任しました。強面な風貌から「ライオン宰相」とも呼ばれ、金本位制の復帰を含むデフレ政策を強力に進めましたが、後に凶弾に倒れた史実は詳しく知られていないかもしれません。政治家は威厳を保つべしといった理想像を貫こうとしていたためか、浜口の人となりや言動から表向きは「全く面白みのない人物」と私には映ります。本編にも記述がある通り、「男はやたらに笑うものではない」という浜口の言葉がそれを象徴しています。しかし、凶弾を受けて「男子の

1分で分かる!

## 「男子の本懐」の あらすじ



新潮社 710円(税別)

### 志を同じくして歩み 凶弾に散った二人

第一次大戦後の不況を脱するべく、金本位制の復帰を成し遂げた首相の浜口雄幸と蔵相の井上準之助。二人の生い立ちをたどりながら、大正末期から昭和初期の日本政治史を描く。

1880年、現在の高知県に生まれた浜口は東京帝国大から大蔵省へ入省し、やがて政治家に転身する。官僚時代は世渡り下手で上司に疎まれ、左遷続きの道を歩むが、高い能力と誠実な人柄で仲間を引き立てられて出世する。政界進出後も徐々に頭角を現し1929年、総理大臣に。国の舵取りは一人では成し得ないと悟り、民間人の井上準之助を大蔵大臣に抜擢した。

浜口と井上は二人三脚で協調外交と緊縮財政を貫き大望を実現するが、共に右翼少年に狙撃され落命。本書の題名は、東京駅で狙撃されたとき、浜口が繰り返した言葉である。

T

### 正反対のタイプを選ぶ

東大震災後の復興や金融恐慌後の財界救済に才を発揮します。仕事の傍らで、ゴルフやテニスにいきそしみ、身なりにもこだわりました。彼を頼る相談者も日銀の中では断とつ。浜口とは正反対なのです。寡黙な浜口と、雄弁な井上。言わば「静」と「動」が二人三脚で国家の大業を成し遂げたわけですが、奇しくも二人ともに凶弾に倒れました。本作はこうした数奇な運命を見事に描いた城山作品の傑作の一つとも言えるでしょう。

仕事における相性というのは不

思議なもので、「馬が合う」からと言っている仕事ができるとは限りません。いやむしろ、合わないほうがいい成果が出るものです。馴れ合いや見て見ぬふりといった人間の弱さを抑止する効果があるからでしょう。リーダーに必要な力の一つは、浜口がそうしたように、自分にはない視点で物事を捕えられる人をどうやって見つけるかとも言えるかもしれません。私自身も30、40代には、馬が合わない上司と長らく仕事をした経験があります。その上司とは仕事の取り組みも性格も徹頭徹尾、合いませんでした。ようやく上司が

異動したと喜んでいたら、またすぐに部下として呼ばれるのです。しかし、馬が合わないことが刺激にもなりました。おかげで新しい仕事に取り組み、古い商慣習を変える事業に携わる経験も積めた。恐らくその上司も私とは馬が合わないと思っただけです。けれども、それを承知で私を下に引っ張ったのでしょう。私自身も大きく成長できたことを振り返れば、リーダーとして実に見事な判断だったわけですね。私のこれまでの経験から言えることは、リーダーは好き嫌いの感情で人を判断するのではなく、組

織に成長や利益をもたらすかどうかをまず見極めることが大事です。それこそ命を賭す覚悟を決めた経営者ならば、自分の周りを「イエスマン」で固めてはいけません。いざというときに判断を誤らないように、自分とは正反対の意見が言える腹心を、勇気を持って身近に置くことです。本作での浜口は、周りの反対を押し切り井上を登用しました。自分とは正反対のタイプにもかかわらず、一緒に命を賭けられる人間だと見込んだからです。浜口のリーダーとしての覚悟とその眼力は感服するほかありません。